第 138 話＜廃鉱のヒ素公害＞の要約と参考資料

第 138 話＜廃鉱のヒ素公害＞の要約

土呂久公害を最初に報道したのは、1971 年 11 月 13 日岩戸小学校教師が教育研究集会で発表したときと長い間信じられてきましたが、それより 2 年前に夕刊デイリーの興梠敏夫記者が「県北にも廃鉱の“ヒ素公害”」という大きな記事を書いていたことがわかりました。

第 138 話＜廃鉱のヒ素公害＞の参考資料

１３８－１　初めて報道された「ヒ素公害」

「県北にも廃鉱の“砒素”公害 / 草の一本も生えぬ土呂久 / 砒鉱の残滓、雨ざらし日ざらし」（1969 年 10 月 31 日、夕刊デイリー）

夕刊デイリーではさる 6 月 16 日付の三面トップ記事で「見立鉱山による日之影川のカドミウム汚染公害はないか？」と大きくキャン・ペーン、警告を発したが、県当局はこれについて無対策のまま時をすごし、北諸県郡高城町の四家鉱山の砒素鉱害に黒木知事もようやくあわてだして調査指示を出す始末である。これでは“人命尊重優先の県政”のお題目もカラ念仏といわざるを得ない。県北は地下資源の宝庫だけに休山、廃山中の鉱山が多く、これら鉱山の目に見えない公害は地域住民の生命を知らず知らずのうちにむしばんでいるともいえる。

西臼杵郡高千穂町岩戸の“土呂久鉱山”もそのひとつ。土呂久鉱山は日向民話で「森田三弥が人から夢を買って開発した」と伝えられるほどの県下では最も古くから開発された鉱山。

盛衰の歴史をくり返しつつ、戦時中は中島航空の系列である中島鉱山株式会社が従業員 400 人以上を使って最大の開発を行なった。終戦とともにそれも夢と果て、戦後は同社によってほそぼそとした稼行がつづけられ、現在では住友金属鉱山 KK 系列の鯛生鉱業 KK が管理、探鉱事業をつづけている。

この土呂久鉱山の公害は何かというと“砒素”である。中島鉱山 KK が土呂久で砒鉱の開発に着手したのはさる昭和 29 年。その年の 5 月に月産処理鉱量、砒鉱 20 トン、含銅砒鉱 20 トンの焙焼炉を 1 基建設した。

もちろん地域住民はこの建設については猛反対運動を起したが、当時の岩戸村長甲斐徳次郎氏、西臼杵支庁長の坂本長年氏が仲にはいり「地下資源の開発は地域住民の福祉にもつながる……」との美名のもとに地域民は泣き寝入り。わずかに生産期間中は年間 10 万円を地域民で結成した和合会に贈る。また月々3 万円を会社が積立てて総額 50 万円になったら和合会指定の金融機関に預け、公害発生時の補償金に当てる――の 2 カ条を契

約覚書きとしただけ。しかし 50 万円の積み立てはついに実現しなかった。

ところでこの砒鉱焙焼炉から出る煙害は 34 年 5 月、ついに問題になり、地域住民は、①椎茸のつきが悪くなった。②農作物のうちとくに豆類の成育が不良になった。③蜜蜂が姿を消して養蜂ができなくなった。と高千穂町に陳情したが、会社側は「鉱山監督局で保安性を認めている」と突っぱり、実情を調査した県当局も結論をださず、この問題はウヤムヤに終った。このとき県当局が派遣した調査係員は“農業技術屋”である。鉱山公害に対する県当局の考えの幼稚さがうかがえよう。

問題は再び 36 年 5 月に爆発した。焙焼炉から出る煙はついに住民の健康をむしばみ、耐えかねた一人、佐藤操さん一家は 4 キロ離れた岩戸地区岩神部落に移住した。当時、操さんは「無風のときは煙が部落を包み、子どものセキが激しくなった。息苦しくて夜も眠れぬ日が多くなり、命が危ないと思って逃げだした」と語っている。

大豆とキュウリの収穫は 2 年つづいて土呂久地区では皆無だった。鉱山側では「監督局の許可を得てやっているので実害はない」の一点張り。部落民の訴えで町当局も“権威者による調査”を県当局に申請したが、行なわれた結果については「ついに報告がなかった」と当時岩戸支所長の坂本来氏（現町助役）は語っている。こういった煙害問題の連続と会社経営の方針から土呂久鉱山での亜砒酸生産は中止になったが――。

それ以前の生産時には煙害がひどく、部落の牛馬が多数死んだという記録も残されている。

ところで亜砒酸生産を中止したあとに問題はないか――というと多分にある。焙焼炉から吐き出された砒鉱・含銅砒鉱の残滓が数千トン。谷を埋めて全くの雨ざらし状態である。そして雨でも降れば残滓を通して砒素を含んだ雨水は岩戸川の支流の土呂久川に直通。さらにこの水は東岸寺用水路に取水されて沿線 29 ヘクタールの水田に分水されている。

この問題について東岸寺用水事務局の松崎秋雄さん（町議）は「鉱山の残滓をバラス変りに道路に敷いたら、沿線の稲作に被害が出たこともあった。用水が砒素を含んでいることはわかっているが、これが長い間土壌に蓄積された場合、どういった結果になるか？心配はしている。また用水沿線には土呂久―立宿―岩元―東岸寺といった部落があって、一部では用水を家庭で使っているところもあると聞いている。近く開かれる町議会で問題を提案してみたいと思っている」といっている。

また 33 年 7 月有望な鉱脈があったといわれる 13 番坑は水脈に突き当って水没し、事実上土呂久鉱山を休山に追いこんだが、この水脈はいまも坑口にあふれ、土呂久川に落ちている。しかしこの水は「砒素含有率が高く、飲料水としては不適である」と検定されている。

生産を中止して 7～8 年になる焙焼炉前の谷に堆積している砒鉱の残滓には、いまもって草一つ生えていない。

そしてこの土呂久川の水は、岩戸川を経て五ヶ瀬川へ。われわれ下流民族はそこの鮎を

喰っている。

１３８－２　興梠記者の無念

興梠敏夫氏（大正 7 年 2 月 20 日生）の「アンケート回答」より

（＊興梠さんが遺したスクラップ帳に貼ってあった）

◎土呂久鉱山とは、昭和 30 年から夕刊ポケット新聞（延岡市）高千穂支局長として 39 年まで、同 39 年からは夕刊デイリー新聞創立発刊と同時に 60 年退職までの 30 年間、鉱害問題以前の企業が関係した、操業に関する事、和合会との煙害に関すること、坑内出水に関する事、探鉱事業団、鉱山労組の（2 字不明）、休山までの過程を機会あるごとに第三者的視覚で取材・報道した。

◎土呂久鉱山が休山後、“砒素公害”として私がはじめて報道したのは 44 年 10 月 31 日付の夕刊デイリー社会面トップ記事で全 1 ページ近いスペースを使い、鉱山地域の悲惨な問題点を社会に訴えた。

◎当時高千穂には、朝日新聞通信部、宮日支局があり、毎日、読売、西日本各社は延岡市に取材支局を置いていた。

◎私は、西臼杵地域の読売、MRT の通信員を兼務し、狭い地域が第二、第三の土呂久同様事件が発生した場合、”闘争”がどうあるべきかを輝かしく勝ち取った土呂久闘争は反省する事件でもあったと思う。私はことし 73 歳、土呂久山の赤い椿の花だけが事件の印象として残るだけである。

１３８－３　夕刊デイリーの記事を初めて知った齋藤先生の驚き

2021 年 11 月 8 日川原から齋藤先生にメール

私は今年の初めに、1969 年 10 月 31 日の夕刊デイリーの記事、見出しは「県北にも廃鉱の”砒素公害”　草の一本も生えぬ土呂久　砒鉱の残滓、雨ざらし日ざらし」という大きな記事を読んで、かなりのショックを受けました。齋藤先生が教研で報告する 2 年前に掲載されたその記事について、まったく知らなかったからです。筆者は、興梠敏夫記者です。

斎藤先生は、71 年 11 月の教研集会で報告した当時、この記事をご存じでしたか？　岩戸小学校の先生の中に、この記事を読んだ先生がおられたのでしょうか？

この 13 日で公害告発 50 年を迎えるので、この記事のことが気になっています。

このメールに夕刊デイリーの記事を添付しますので、憶えておられるかどうか、聞かせていただけませんか。

斎藤先生から返信

夕刊デイリーがこんな記事を載せていたのですか。もちろん、私は、全く知りませんでした。私が夕刊デイリーのことを知ったのは告発後、ずっと後のことで、どなたかが、夕刊デイリーにあなたのことが載っているよと教えてくださったことがあった時です。それまでは延岡に夕刊デイリーという新聞があることすら全く知りませんでした。当然のことながら当時の岩戸小勤務の先生方も全然知りませんでした。全員が岩戸に住んでおられたからです。
貴重な資料、誠にありがとうございました。夕刊デイリーがこんなに詳しく真剣に、これほどしつこく県当局にその対策を要求していたとは、本当に驚きです。お礼を言いたいほどです。